

3 永吉天神段遺跡の集団墓

昨年度までの本遺跡の調査では弥生時代中期（約2100～2000年前）の住居跡が多く見つかっており、集落があったことが分かっています。今年度調査が行われた場所は、集落跡の西側にあたる区域です。ここは地元では畏怖されている場所です。

近年、大隅半島では永吉天神段遺跡以外でも、弥生時代中期の集落跡が各地で発見されています。ただ未だに不明なのは、首長を中心とする広域的集団組織、つまり『クニ』の存在。

その謎についての有力な手掛かりは、集団墓地および副葬品などで得られます。しかし、これまで大隅地域で発見された弥生時代の集団墓は、京ノ峰遺跡（志布志市松山町）だけでした。そのような意味でも永吉天神段遺跡の集団墓は非常に貴重な発見だったのです。

一つの遺跡で住まいの空間である集落と、聖なる空間である墓域が発見された初めての類例です。集団墓が発見されたエリアと集落が立地するエリアとの間には、浅い谷が入り込んでいることが分かりました。自然の地形で集

落と墓域を分けているようです。円形周溝墓のあった場所は東側にある集落を見渡せる、辺りでも最も小高い場所にあります。

集団墓は、遺跡の立地する台地の北側部分にあります。円形周溝墓のある場所を頂点とし、南西と北西側に扇状に広がる下り勾配の傾斜地に墓群が広がっています。ちょうど円形周溝墓から見て、集落が位置する方向と逆側の



※ここでの住居跡は集団墓の形成時期とは異なる時期です。

調査区上空写真と集団墓の配置

方向に広がります。これらの墓は、傾斜地に無造作に広がっているのではなく、墓は2つの列群に形成されているようです。円形周溝墓は一基だけ確認されており、その他の墓は『土坑墓』と呼ばれる墓で、人が伸展した状態で埋葬されるように竪穴を掘った形をしています。しかし、中には『横口式土坑墓』という墓もあります。竪穴床面から、さらに片側壁側にえぐり込むような掘り込みを入れて、その掘り込み部分に遺体を納めるといったものです。発見された集団墓には埋葬に木棺を使用した痕跡がみられる墓もあります。

円形周溝墓が集団の中心的な人物の墓というのは、立地や他の墓と唯一異なる点からも想像できます。その他の土坑墓について二列の墓群が、わずかに時期に形成時期が違うのか、あるいは階級の差や社会的立場などによって埋葬地が指定されていたか、今後の検討課題と言えます。また、横口式土坑墓は、北部九州に確認されますが、県内での発見は初めてですので、北部九州勢力との関係も検討すべき課題と言えます。

4 さくらんぼ

過去の発掘調査によって大隅地域では弥生時代中期（約2100年前）以降、瀬戸内地域や近畿地方、九州北部との結びつきを示す土器が発見されています。この頃の大隅地域が、西日本の中でどんな役割をしていたのか、今後の調査研究が期待されます。

今回の調査では、首長を中心とする政治的秩序が存在し、積極的に他地域との連携を図っていたことが分かると言えます。

写真提供・鹿児島県立埋蔵文化センター

